話し相手ボランティアの活動支援としての「養成講座」に関する一考察

－ハンナ・アレントの「活動」理論を視座として－

横山貴美子

要　約

筆者は、話し相手ボランテイアの行動原理、組織原理、社会原理の解明というテーマに沿って研究を続けている。

そのテーマに沿って、本稿では、まず、日米の話し相手ボランティアの活動実態と支援体制の現状を比較分析することによって、わが国の活動支援の課題を明確にする。そして、ハンナ・アレントの「活動」理論に基づき、聴くことの難しさの背後にあるものを考察する。そのうえで、活動支援の一環であると位置付けたトレーニング・プログラムの具体的な内容を示すことを目的とした。

その結果、トレーニング・プログラムには、人間の基本的条件としての「多数性」、および「対話」の状態を具体的に想像することができる内容が求められる。さらに、プログラムには「変化することを恐れない、しかも自ら変えるのではなく変わることを待つこと」を想像することができる内容も含まれなければならない。それらを実現した内容は、「路上の２人」および「人間の彫刻」の演習である。

キーワード：話し相手ボランティア、活動支援、ハンナ・アレント、活動理論、対話

はじめに

わが国における「話し相手ボランティア」は、1980年代頃から、主に在宅高齢者を対象とする社会福祉サービスの担い手として、社会福祉協議会等が活動主体をボランティアに求め、中高年齢の主婦層がそれに応えるという形で始まったボランティア活動である。

1996年に全国社会福祉協議会が実施した「全国ボランティア活動者実態調査」の報告書[1]によると、「相談・話し相手等」ボランティアの全ボランティアに占める割合は17.4％であり、2002年には「話し相手」ボランティアとして、その割合が37.2％になっていることが報告されている。[2] 6年の経過の中で、活動内容が「相談・話し相手等」という幅を持たせた表現から「話し相手」という表現に変わったこと、その活動者の割合が約2倍になっているという結果から、「話し相手ボランティア」活動の広がりを確認することができる。

このように、実態としては四半世紀の実績をもつ活動であるにもかかわらず、今日に至って注目されるようになったその背景として、新聞やテレビ等のメディアが「傾聴ボランティア」としてその活動を紹介するようになったこと、看護・介護現場でケアに携わる専門職や哲学[3]・社会学・社会福祉学等の研究者が、それぞれの立場で「対話・聴くこと」に着目し、それを力として捉えるようになったことなどが考えられる。

話し相手ボランティアは、対象者の思いや気持ちを聴く活動である。しかし、聴くことは、ボランティアをはじめ多くの関係者に難しいと認識されている。なぜ、聴くことは難しいのか。また、どうすることによって難しさは解消されるのか。

本稿は、まず、日米の話し相手ボランティアの

（所　　属）
山梨県立大学　人間福祉学部　福祉コミュニティ学科

実態と活動支援の現状の比較分析と、先行研究の整理を行う。それを背景に、ハンナ・アレントの「活動」理論[4]に依拠しながら、聴くことの難しさの背後にあるものを考察したうえで、実証的研究において課題として提起されている、活動支援の一環としての養成講座のあり方とその内容を具体的にすることを目的としている。

1．研究の背景

1．1　話し相手ボランティアの活動実態
～日・米の活動比較～

筆者は、話し相手ボランティアの活動実態を、各ボランティア・グループの紹介文やパンフレットを中心に、「名称・目的・形態・活動者・対象者・活動場所・活動内容」の７項目について整理した。（**「日米の話し相手ボランティアの比較」表**参照）

その結果、調査対象の活動主体すべてが、活動内容については１対１という関係性のなかで対象者の思いや気持ちを「聴くこと」としながらも、他の調査項目においては、ボランティア個々やボランティアグループの意向と対象者の求めによって諸様相を呈していることがわかった。

また、諸外国において、日本の話し相手ボランティアに相当する活動が展開されているのはアメリカ合衆国であろう。アメリカにおいては、「シニア・ピア・カウンセラー」と称され、その実態を、ルース・キャンベルが1988年に「ソーシャル・サポート・システム－老人のためのピア・サポート・システム」[5]のなかで報告している。その代表的なものとしては、ミシガン州のターナー老人診療所の取り組みとサンフランシスコ市公衆衛生局のＰＡＳＳ（Partnership Assessment Services For Seniors）がある。

「シニア・ピア・カウンセラー」は、高齢者の健康診断と治療に実績を有する「ターナー老人診療所」のスタッフの気づきから始まっている。つまり、高齢者が必要とするサービス内容は高齢者でなければわからないという気づきである。その結果、サポート・プログラム作成に高齢者の参加を求め、その過程で、シニア・ピア・カウンセラーの養成も行うようになった。ターナー診療所が養成した「シニア・ピア・カウンセラー」は地域に出向き、参加した高齢者のリーダー的存在としてワークショップや小グループ活動を盛り上げ、派生的に日本の話し相手ボランティアに相当する個別カウンセリングを担うようになっていったことが特徴的である。

また、サンフランシスコ市のＰＡＳＳにおいては、シニア・ボランティアは公募され、規定の講座を受講後、スタッフの面接を経て認定された者のみが「シニア・ピア・カウンセラー」として活動を開始する。その後は、専門職による個別相談等のサポートと公的機関による財政支援があり、自治体の高齢者施策を担うボランティアとして位置づけられている。

以上のように、日・米の「話し相手ボランティア」の活動実態を比較することによって、それぞれの特徴が明らかになってくる。

アメリカにおいては、高齢者を対象とした保健福祉サービスの提供プロセスにおいて、ピアとしての高齢者の参与が求められ、そこを出発点として、ハイ・リスクの高齢者を対象とした自治体の福祉施策を担うボランティアとして「シニア・ピア・カウンセラー」が位置づけられている。また、ＰＡＳＳにおいては、８週16回に及ぶ養成講座を開講し、まずはそれを修了することが求められる。つまり、受入から継続のプロセスにおいて財政支援と専門職（主にソーシャルワーカー）によるサポート体制が確立しているのである。

対象者の思いや気持ちを聴く活動であること、活動者がボランティアであることは日米の共通項であるが、日本においては、活動の対象者とボランティアが厳密にピアに限定された活動として始まったものではなく、その展開プロセスはグループや個人に委ねられてきた。

また、アメリカのシニア・ピア・カウンセラー養成講座のように体系化された内容が提供されてきたわけではなく、概ね、ボランティアを募った自治体や社会福祉協議会等が、活動の心構えなどを２～３回の講義を通して伝え、活動が開始されてきた経緯がある。

日・米の話し相手ボランティアの比較

	日　　本	アメリカ
出現時期	1980年代後半～	1970年代～
名　称	話し相手訪問　友愛電話 傾聴ボランティア　友愛訪問 シニア・ピア・カウンセラー	シニア・ピア・カウンセラー
役　割	ふれあい　生きがいづくり 安否確認　存在を共にする 情報提供　心のケア	ワークショップのリーダー 小グループ活動のリーダー 個別カウンセリング　代弁者
形　態	1対1の対面（訪問）　電話	1対1の対面(訪問)　グループ
活動者	主に中･高年齢層	高齢者
対象者	高齢者（独居・高齢世帯） 障害・病気を持つ人 ホスピスケアの必要な人　家族	地域の高齢者 ハイ・リスク高齢者 （ホームレス、独居）
活動場所	個人宅　福祉施設　病院	個人宅　地域の公共施設
活動内容	思いや気持ちを聴く	思いや気持ちを聴く
位置づけ	個人やグループによる任意のボランティア活動	各自治体の高齢者政策を担うボランティアとして登録
支援体制	支援体制の未整備 ・概ね、ボランティアを募った自治体や社会福祉協議会等が、活動の心構えなどを講義 ・活動の開始と継続は、個々のグループや個人に任される	支援体制のシステム化 ・マニュアルに沿った講座の開催 ・専門職の面接やサポート ・公的機関からの基金援助

そのようななかで、F協会（現NPO法人）が、アメリカのシニア・ピア・カウンセラーの養成講座の内容をいち早く導入したことによって、養成講座を含むサポート体制のあり方に一石を投じることとなった。

1．2　研究の経緯と課題

村田は、本活動を「傾聴ボランティア」と称し、その「聴くこと」に専念する活動を通して、傾聴は「関係存在である人間」の存在を支える大きな力となり、「重い病気や障害で苦しむ人、特に死に臨み、その存在そのものを失う不安に苦しむ終末期の患者さんや家族にわれわれのできる最後の最大の援助」であると位置づけた。[6] そして、活動の場を、主にターミナルケアの場としながら、良き聴き手となるためには、しっかりとした基盤の上にたった系統的な教育と訓練が必要であることを提起し、具体的には、①何を聴くのか、②どのように聴くのか、③なぜ聴くのかの理解と、傾聴するときに常にこれらのことを意識した実践で

あるべきとしている。

また、小澤は時系列データに基づく事例的検討という手法によって、基礎的研究としてシニア傾聴活動の実態調査を行い、傾聴活動は利用者およびボランティアの日々の気分の改善に一定の影響を与えていること、また、ボランティアにとって、特に、活動をすぐに開始するための情報提供、専門家のスーパーバイズ、現場スタッフのカンファレンスなどが不足していることを明らかにしている。[7] そして、地域で芽生え始めた各ボランティアグループの力を伸ばすためには、専門家や他の地域リソースを含めた総合的な活動支援システムおよびネットワークの構築が必要であると提起している。

筆者は、話し相手ボランティアグループＫを対象にケース・スタディを実施し、ボランティアが対象者の話を聴くことを継続することは、孤独を主体的に選択しているわけではない対象者に、他者との関係のなかでその都度与えられ、確証されるアイデンティティの確認の場を提供していることになり、ボランティア自身も生きがいを得ているということ、また、いわゆる「定例会」* が活動の継続性において一定の影響を及ぼしているとの結論を導いた。[8]

多くの話し相手ボランティアが活動の対象と考えている、主に、高齢者や障害者、また、その家族を取り巻く環境は、どういう状況として具現化しているのだろうか。厚生労働白書等によると、そのキーワードは、「孤立・孤独」である。[9] そして、ハンナ・アレントは、「人間の条件」のなかで、現代を「『活動』も『言動』もなく、リアリティを帯びない非人間的空間にあって、人としての存在の危機的状況に直面している」[10]時代であると表現している。

このように、「孤立・孤独」、「非人間的空間」、「存在の危機的状況」をキーワードとするような生活を余儀なくされている対象者にとって話し相手ボランティアの果たす役割は大きく、その有用性が明らかになりつつある。

現在、話し相手ボランティアは、その活動者の裾野を広げつつある。このボランティアの力を伸ばすためには、「よき聴き手」となるための系統的な教育と訓練の場を含めた、専門家や他の地域リソースによる総合的な活動支援およびネットワークの構築が求められており、その一環である養成講座のあり方を考察し具体化することは喫緊の課題であると考えている。

２．活動支援の一環としての「養成講座」に関する考察

２．１　養成講座の基本的視座　～ハンナ・アレントの「活動」理論に依拠して～

話し相手ボランティアの活動内容は，対象者の思いや気持ちを聴くことにある。しかし、本活動は多くのボランティアとその関係者に「話し相手ボランティアは、簡単なようでいて案外難しい」と言わしめる〝難しさ〟を内包した活動でもある。村田が、話し相手ボランティアには、「しっかりとした基盤の上にたった、系統的な教育と訓練」が必要であるとするのもこの難しさ所以ではないだろうか。しかし、なぜ、何が難しいのか。

「『聴くこと』はなんら特別な行為ではないし、『聴くこと』を単独で取り出してみても意味のあることではないだろう。しかし、聴くことが難しいとすれば、それは聴くことと語ることが常に対でしかありえないにもかかわらず、聴くことと語ることが分離してしまうからではないだろうか」と本間[11]は指摘する。

「聴くことと語ることが分離してしまう」ために聴くことが難しいとすれば、聴くことと語ることが常に対であり得る状態、それを〝対話〟というなら、対話の成立によって、聴くことの難しさは解消する。対話の成立を阻む要因はどこにあるのだろうか。

そして、本間は、聴くことの実践のなかでもっとも大切なことは「変化することを恐れない、し

---

* 筆者がケーススタディを実施したグループＫは、「定例会」と称し、毎月一回２時間程度、メンバーが集う会を開き、活動についての様々な話題や課題を共有する場として機能していた。

かも自らかえるのではなく、変わることを待ち構える」姿勢であるという。[12] その姿勢を支える視座とはどういうものであろうか。

アレントは「活動」のひとつは、「創始する・始める」というひとりの人物が行う「始まり」を意味し、公的領域においてのみ、行為と共にその行為者をも暴露するという固有の傾向として始まると「活動」理論を展開する。

そして、人間の「多数性」という基本的条件のもと、はじめる活動は、言葉によってこそ人間に理解できるように暴露される。その行為を意味あるものにするのは、ただ語られる言葉だけである。その言葉によって、行為者は、自分を活動者として認め、自分が何をするか、何をしたか、何をするつもりであるかということを知らせる。そして、自分がだれであるかという「唯一性」を積極的に明らかにし、人間世界にその姿を現わす。それは人々に向けられるから、人々の間で進行する。

また、もうひとつの「活動」は、人々が大勢加わり、ある企てを「担い」「終わらせ」見通して、その企てを達成する過程でもある。それは、人間関係の網の目という環境の中で行われ、ひとつひとつの過程が新しい過程の原因となるため、活動の結果には限度がない。そして、ひとつの行為、ひとつの言葉でも、全ての布置を変えるのには十分であると論を進める。

そして、これらふたつの「活動」は公的領域においてのみ始まるものである。公的領域とは、万人によって見られ、聞かれ、可能なかぎり最も広く公示される現われの場であり、人びとを結びつけると同時に、人びとを分離する世界そのものを意味している。

「現われ」とは、他人によっても私たちによっても見られ、聞かれる何者かであり、それがリアリティを形成する。口に出して語るたびに、私たちはそれをいわばリアリティを帯びる領域の中に持ち出している。リアリティに対する感覚は、完全に現われに依存している。したがって、公的領域の存在に依存していることになる。

しかし、近代に入り私的でも公的でもない社会的領域が出現し、その境界が曖昧になっていった。そして、それはひとつの意見、利害しかもたないような単一の巨大家族の成員であるかのように振舞うことを要求することになったのである。

現代は、その社会的領域が世界における自分の場所のみならず私的な家庭まで奪い、公的なるものが私的なるものの一機能となり、私的なるものは残された唯一の公的関心となった大衆社会を形成するにいたった。その結果、人びとの介在者であるべき世界が、人びとを結集させる力を失い、ひとびとを関係させると同時に分離する力を失うことになった。大衆社会は、他人に対する「客観的」関係や、他人によって保証されるリアリティを奪ってしまった。

このように、「活動、現われ、公的領域、私的領域、社会的領域」をキーワードとするアレントの「活動」理論は、聴くことを難しくしている対話の不成立の要因を明確にしてくれるものである。

つまり、対話の成立は、アレントのいうところの「万人によって見られ、聞かれ、可能なかぎり最も広く公示される現われの場であり、人々を結びつけると同時に、人びとを分離する世界そのもの」である公的領域の存在に依存しているのである。「現われがリアリティを形成」するのであり、「リアリティに対する私達の感覚は、完全に現われに依存している。したがって、公的領域の存在に依存している」のである。

話し相手ボランティアは、活動を開始するにあたって、「私達が見るものを、やはり同じように見、私達が聞くものを、やはり同じように聞く他人が存在するおかげで、私達は世界と私達自身のリアリティを確認することができる」存在であり、活動と言論を行うために、その周囲に他人を必要とする存在であることを、対象者との関係性においてイメージできなければならないだろう。

また、鷲田が言うように、「言葉が『注意』をもって聴き取られることが必要なのではなく、『注意』をもって聴く耳があって、はじめて言葉が生まれるのである。」[13] とするなら、聴くことを活動内容とする話し相手ボランティアは、他人によって保証されるリアリティを奪われ、聴くことと話すことの分離を余儀なくされた対象者に相

対することによって、彼を口に出して語らせ、それをリアリティを帯びる領域の中に持ち出す「聴く耳」となることを活動の本分と心得なければならない。

話し相手ボランティアが、村田の言うところの「良き聴き手」としてあるためには、「多数性」という人間の基本的条件と、「対話」の在りようを具体的にイメージできる内容を基本プログラムとして提供することが求められる。

そして、聴くことの実践において「変化することを恐れない、しかも自らかえるのではなく、変わることを待ち構える」姿勢を支える視座を具体化した内容も講座のプログラム内容として求められるであろう。

2．2　養成講座の実際

現在のわが国における話し相手ボランティア養成講座として、F協会主催のプログラムを挙げることができる。F協会はいち早く、アメリカのシニア・ピア・カウンセラー養成プログラムを日本に導入した団体である。その具体的なプログラム内容は、以下の通りである。

【講座名】「傾聴ボランティア養成講座　～高齢者の傾聴を中心として～」
【対象者】基本的にすべての講座に参加でき、活動に関心をよせる人
【回　数】12回（1回につき2時間30分）
【スタッフ】団体代表者　大学院教授　カウンセリング研究会スタッフ　臨床心理士
【形　態】基本的に毎回、ミニレクチャー＋体験学習の形で進める
【内　容】
①「傾聴の意味と意義（聴くことは対人援助であることを知る）」
②「高齢者の心理と生涯発達（加齢とは衰退だけではないことを知る）」
③「傾聴のスキルを学ぶ（聴く）」
④「　　〃　　（話す、聴く、観る）」
⑤「　　〃　　（受容的，共感的理解）」
⑥「　　〃　　（話し手に沿って聴く）」
⑦「　　〃　　（対話訓練）」
⑧「　　〃　　（言い換え、要約）」
⑨「　　〃　　（痴呆の実態と症状，対応方法を知る）」
⑩「　　〃　　（質問の扱い方）」
⑪「　　〃　　（開かれた質問と閉ざされた質問）」
⑫「　　〃　　（スキルの統合と全体のふり返り）」

また、筆者自身も居住地において「話し相手ボランティア養成講座」に関わり、現在までに約90名の講座修了生を輩出している。その具体的なプログラム内容は以下の通りである。

【講座名】「話し相手ボランティア養成講座」
【対象者】在宅介護支援センターが管轄する地域住民
【回　数】6回（1回につき2時間30分）
【スタッフ】大学教員（筆者）　在宅介護支援センター職員　福祉系大学大学院生数名
【形　態】講義、演習、体験
【内　容】
①【講義】「話し相手ボランティアの始まりと現状」
　【演習】「路上のふたり」
②【講義】「生活拠点である地域の現状とその特徴」
　【演習】「人間彫刻」
③【演習】「座る位置（伝わること）」
　「3分間スピーチ（伝えること）」
　「『I』の承認」
　～この間に、各自で話し相手ボランティア体験～
④【演習】「体験を基にコミュニケーションの実際とあり方を考える（その1）」
⑤【演習】「　　〃　　（その2）」
⑥【講義】「話し相手ボランティア開始にあたって」

以上、F協会の講座プログラムと、筆者の立案によるプログラムを紹介した。両プログラム内容を比較すると、F協会のそれは、多くが演習などの体験学習を通して傾聴技術を習得する内容となっ

ている。

また、筆者のそれは、回数も半分であり、傾聴の技術習得にはそれほどの時間を割いていない。そして、前項で考察を行った養成講座の基本的視座を具体化した「路上のふたり」,「人間彫刻」という二つの演習を盛り込んだことが特徴的である。

2.2.1　演習「路上のふたり」

演習「路上のふたり」は、わけありのふたりが路上を歩くパントマイム劇である。その所要時間は、メンバーの座った椅子によって囲われた（楕）円形の大きさにもよるが、5分前後で終了するものである。それを観ているメンバーには、パントマイム劇終了後に自分が観たものを自身のことばで表現してもらいたいことを伝えておく。

以下、演習のながれである。

① 室内をできるだけ広く利用して（楕）円形に椅子だけを並べ、各自座る
② 受講者の中より、パントマイムを演じる2名を任意に選ぶ
③ 選ばれた2人を別室（他の受講者に相談内容が聞こえない場所であればどこでもよい）に誘導し、実演するパントマイム内容について説明を行う
　ｅｘ）引きこもりがちな子供とその子供をなんとか説得して学校まで送り届けたい親という設定で、グループメンバーが座る（楕）円形の空間を家から学校までの路上と考え、パントマイムで歩く
④ 別室で説明を受けた2人は、即興で役作りを行う
⑤ メンバーは、2人が演じるパントマイム劇を観る
⑥ パントマイム劇が終了した段階で、どのように観えたかをひとりひとり発表する
⑦ 全員が発表し終わったところで、演じたふたりに各自課せられた役どころを解説してもらう

「路上」という設定である。たとえば、スクランブル交差点を歩くときなど、視線の隅で捕らえてしまった人に対しては一瞬のうちに品定めが終了している場合がある。そして、自身の描いた品定めの物語に確信をもち自己内で完結している。

この演習を実施するなかで、「2人のパントマイム劇がどのように観えただろう？」という問いかけに対して、ほとんどの人が「わからない」とは答えない。観ているのは歩く二人のしぐさだけであるにもかかわらず、それぞれの性別（女性が演じたから女性とは限らない）、年齢、関係はもとより生きてきた半生まで克明に説明しようとする。そして、一定の傾向はあるにしても、同じものを同時に観ながら、その観え方はひとり一人異なるものである。

アレントは、「『活動』は『創始する・始める』という、ひとりの人物が行う『始まり』を意味し、公的領域においてのみ、行為と共にその行為者をも暴露するという固有の傾向として始まる。そして、人間の『多数性』という基本的条件のもと、はじめる活動は、言葉によってこそ、人間に理解できるように暴露される。その行為を意味あるものにするのは、ただ語られる言葉だけである」と言った。

30名弱のメンバーを前にして、ひとりひとりがパントマイム劇に観たことをことばにする行為は、アレントのいう「活動」といえるのではないだろうか。この演習は、「活動と言論が行われるためには、その周囲に他人が居なければならない」という人間の基本的条件である「多数性」を認識することと、聴くことと語ることが対であるはずの「対話」は、同じものを見ていても同じように観えていない異質な他人と出会い、その異質さを認め合うことから始まるのではないかということを喚起する演習であると位置づけている。

2.2.2　演習「人間彫刻」

演習「人間彫刻」は、非常に困難を抱えた人の思いを彫刻として表現する演習である。以下、演習のながれである。

① 全体を、1グループ4～5名に再編成する
② グループ毎に「非常に困難を抱えた人」を想

起し、その具体像を共有する話し合いを行う

③　各グループ１名の彫刻役を選び、②で具体的になった「非常に困難を抱えた人」の思いを彫刻として表現してもらう

④　全グループに、その彫刻がどのような困難を抱えた人のどのような思いを表現したものであるのかを発表してもらう

⑤　発表が一巡したところで、改めて１グループずつ彫刻を再現してもらい「彫刻の思いに働きかけて、彫刻を動かして欲しい」と指示する。働きかける人は、任意のグループメンバーとする

　彫刻役のメンバーには、「本当に動きたいと思ったときに、動かしたいところを動かして欲しい」と伝える

⑥　彫刻が動く場合、動かない場合が出現するが、その都度、彫刻役のメンバーには、「なぜ、動けなかったのか。なぜ、動こうと思ったのか」を発表してもらう。それを全メンバーで共有する

聴くことの実践のなかでもっとも大切なことは「変化することを恐れない、しかも自らかえるのではなく、変わることを待ち構える」姿勢であるとした時、その難しさは、この姿勢をキープすることの難しさだろうと前述した。「変わることを待ち構える」姿勢を支えるものは一体何なのか。それを「人間彫刻」の演習を通して考えたかった。

彫刻は、グループで考えた困難さの極みを表現したものである。それは、頭からつま先まで緊張し閉塞的である。なぜなら、穏やかさ、軽さ、平和などの対極にある思いを表現しているためである。次に、彫刻を生身の人間としてイメージし直し、今度は固まっている人を「動かして欲しい」と促す。彫刻であった人は、思いを表現しているわけであるから思いを動かす方法を考えることになる。どうしていいのか、とっさには動きが取れず、ほとんどの人が立ち尽くす。

そのようななかで、あるグループのメンバーが彫刻に向かって、「どうしてあげればいいのかわからない。……教えて欲しい。」と搾り出すように訴えた。それまで、引いても覗き込んでも言葉をかけても〝ぴくり〟ともしなかった彫刻がかすかに首を動かした。「なぜ？」と彫刻に確認すると、「困らせちゃいけないと思った。」という。非常に困難な状況にあるはずの人のなかにも、「他人を思いやる」という力が内在している。彫刻を動かそうと試みたメンバーは、窮地に立ったときのお手上げ発言が功を奏したことに驚く。

メンバーの多くは、非常に困難を抱えた人を目の前にすると、なんとか助けてあげたいと思い、その困難さ加減の分析を試みたり、既存の知識を駆使して「こういう方法もある，ああいう方法もある」と説得を始める。そのような時、往々にして彫刻は動かない。しかし、彫刻を動かそうと試みる人が、じっと傍らにたたずんでいたり、ひざにそっと手を置き、自身の心情を自分の言葉で話し始めた時など、まるで、聴く耳持たないと見える彫刻が動き出す。

「変わることを待ち構える」姿勢を維持するためには、あらゆる人にその人固有の健康な力、持てる力が健在しているのだという視点が求められはしないだろうか。そして、変えるのは本人であるということを。

「言葉が『注意』をもって聴き取られることが必要なのではなく、『注意』をもって聴く耳があって、はじめて言葉が生まれるのである。」とした時、この「注意」は、目の前にした対象者の問題点を暴く「注意」ではなく、背後に隠れがちな健在する力を見つめる「注意」であると考えてもいいのではないだろうか。

３．まとめ

ボランティア活動は、自発性、公共性、連帯性、無償性を性格として、先駆的、開拓的役割を担っているといわれるが、それが発現する次元で、その活動実態が錯綜した関係にあるため、①行動原理（個人レベルでの行動規範に関わるもの）、②組織原理（組織レベルでの活動と運営の理念にかかわるもの）、③社会原理（活動を社会の仕組みとしての制度的な次元で位置づけるもの）の各レベルでの達成課題の整理が必要となる。

筆者は、実証的検証を通して、話し相手ボランティアの行動原理の解明を試みてきた。

その結果、〝互酬的関係性〟や〝対話〟といったキーワードを抽出することができ、昨今の研究は、「孤立・孤独」、「非人間的空間」、「存在の危機的状況」をキーワードとするような生活を余儀なくされている対象者にとっての話し相手ボランティアの有用性を明らかにしつつある。

現在、話し相手ボランティアは、その活動者の裾野を広げつつある。このボランティアの力を伸ばすためには、「よき聴き手」となるための系統的な教育と訓練の場を含めた、専門家や他の地域リソースによる総合的な活動支援およびネットワークの構築が求められており、その一環である養成講座のあり方を考察し具体化することは喫緊の課題である。

本稿は、「行動原理」の解明に引き続き、「組織原理」「社会原理」の解明に向けて、日米の話し相手ボランティアの活動実態と支援の現状を比較分析したうえで、わが国の支援体制の課題を明確にし、ハンナ・アレントの「活動」理論に依拠しながら、聴くことの難しさのその背後にあるものを考察したうえで、養成講座のあり方とその内容を具体的にすることを目的にしたものであった。

その結果、話し相手ボランティアが「良き聴き手」としてあるための活動支援として、「養成講座」のプログラム内容は、「多数性」という人間の基本的条件を喚起し、「対話」の在りようを具体的にイメージできるものでなければならない。

そして、聴くことの実践において「変化することを恐れない、しかも自ら変えるのではなく、変わることを待ち構える」姿勢を支える視座を具体化した内容も講座のプログラムとして求められることを結論として導いた。具体的には、「路上のふたり」と「人間彫刻」というふたつの演習をプログラム内容として提起した。

「路上のふたり」は、アレントのいう「活動と言論が行われるためには、その周囲に他人が居なければならない」という人間の基本的条件である「多数性」と、聴くことと語ることが対であるはずの「対話」は、同じものを見ていても同じように観えていない異質な他人と出会い、その異質さを認め合うことから始まるのではないかということを喚起する演習として位置づけた。

また、「人間彫刻」は、「変わることを待ち構える」姿勢を支えるためには、あらゆる人にその人固有の健康な力、持てる力が健在しているのだという気づきを喚起する演習として位置づけた。

参考文献

1）全国社会福祉協議会（1996）：全国ボランティア活動者実態調査報告書、Ⅱ-10

2）全国社会福祉協議会（2002）：全国ボランティア活動者実態調査報告書、P 64

3）大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室は 1998 年より、看護・介護の経験者である社会人を受け入れ、多種多様な大学院生が臨床哲学の創出・展開にそれぞれの立場から参加している。そのテーマのひとつに「対話」がある。研究の成果をまとめた報告書として、科学技術政策提言「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」（平成 15 年 3 月、研究代表者　大阪大学大学院文学研究科・教授　鷲田清一）を上梓している。

4）ハンナ・アレント、志水速雄訳（1994）：人間の条件、ちくま学芸文庫、P285-402

5）ルース・キャンベル（1988）、児島美都子訳：ソーシャルサポートシステムー老人のためのピア・サポート・マニュアル、医療福祉のネットワーク、中央法規出版、146-192

6）村田久行（2000）：傾聴ボランティアのトレーニングプログラムとスピリチュアルケアの実践、ターミナルケア、10（2）、三輪書店

7）小澤元美（2003）：シニア傾聴活動におけるボランティアのＱＯＬにおよぼす影響、筑波大学大学院修士論文

8）筆者（2002）：話し相手ボランテイアと高齢者の相互作用に関する研究　ー話し相手ボランテイアの「聴くこと」の視点からー、日本社会事業大学博士前期課程論文

9）厚生労働白書（2001）：1.1 個人をとりまく社会経済情勢の変化、ぎょうせい、P 4-100

10）ハンナ・アレント、志水速雄訳（1994）：人間の条件、ちくま学芸文庫

11）本間直樹（2001）：いま改めて聴くことの意味を考える、精神科看護、28（7）、P11

12）本間直樹（2001）：前掲書、P12

13）鷲田清一（1999）：「聴く」ことの力、ＴＢＳブリタニカ、P163

A Study on Training Program as a Listening Volunteer's Activity Support

− Based on "Action" Theory of Hannah Arendt −

YOKOYAMA Kimiko

Abstract

I think that the subject of the activity support for the listening volunteer of our country becomes clear by making the comparative analysis of the Japan-U.S. present condition. And I analyze the difficulty of listening it based on "action" theory of Hannah Arendt. It shows the state of "training program" and raises the concrete contents of a program. This showed that the "plurality" which is man's fundamental conditions, and the contents which can imagine the state of a "dialog" concretely had to be programmed in the training program. Moreover, the contents which can imagine that it is not afraid of changing, and the contents which can imagine waiting to change are also included in a program. The contents which materialized them are the exercise of "two persons on the street", and the exercise of "human sculpture."

Key words : A Listening Volunteer, Training Program, Solitude Hannah Arendt, Action, Dialog